

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン＝ ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉 ——「形式的自由」の導入をめぐる⁽⁷⁶⁾(2)——

耳 野 健 二

- 第1章 はじめに —— 問題の所在と考察方法
- 第2章 ベートマン＝ホルヴェークの生涯と著作 (以上52巻2号)
- 第3章 1840年頃までのベートマン＝ホルヴェークの法思想における「自由」の意義 (以上本号)
- 第4章 1850年代以降のベートマン＝ホルヴェークの法思想における「自由」の意義
- 第5章 おわりに

第3章 1840年頃までのベートマン＝ホルヴェークの法思想における「自由」の意義

さきにみたように、ベートマン＝ホルヴェークは、サヴィニーの示唆に基づき、1820年に民事訴訟法学に取り組み始め、1830年代には法の哲学的基礎づけについて独自の思想を表明するにいたった。1838年には、サヴィニーが『体系』の草稿を執筆するさいこれに協力しつつ、草稿に対するコメントというかたちで自らの詳細な思想を展開している。本章では、このようなベートマン＝ホルヴェークの前半期における法の哲学的考察をとりあげ、この時期の「自由」の意義を検討する。

1. 法による自由と「最高の自由」——『綱要』第3版の序論(1832年)

この時期のベートマン＝ホルヴェークの法思想を表明した著作として、

(76) 本稿は、科研費(基盤(C)、課題番号18K01228)の支援に基づく研究成果の一部である。

まずは1832年の『綱要』第3版の序論が重要である。この序論は、すでにふれたように、ベートマン=ホルヴェークが独自の法思想を、ある程度はじめて表明しえた重要な作品であるからである。

(1) 法の認識方法 —— 法の歴史的な見方

この『綱要』に付された序論の冒頭、ベートマン=ホルヴェークは、実務法律学ないし法適用の一般諸原則を明らかにすることを目的に掲げ、そのためには「法それ自体の認識⁽⁷⁸⁾」を必要とすると述べている⁽⁷⁹⁾。そして、そのような認識を得るには「法の本質」を問うべきだといふ⁽⁸⁰⁾。

では、ベートマン=ホルヴェークが考える「法の本質」とはどのようなものだろうか。彼はおよそ次のようにいう。すなわち、すべての法を「立法」すなわち「国家における最高政府の恣意的確定⁽⁸¹⁾」に由来すると考える見解は斥けられるべきである。なぜなら、かかる見解は、「完全な立法」を「通常の状態」と考え、「補完的な慣習法を不可欠の悪」と解するからである。あるいは、法学の対象を「制定法の知識」すわち「文字を媒介とする立法者意思」に制限することで、法典において「判決がすでに下されている」、あるいは判決が単なる「論理的・機械的包摂⁽⁸²⁾」によって得られる、という帰結をもたらすからである⁽⁸³⁾。こうした「機械主義⁽⁸³⁾」は、「思考する存在の尊厳に反する」ものであり、「軽薄な操作⁽⁸⁴⁾」を行なっているにすぎない。

このような見解に代わって採用されるべきなのが、法の「歴史的」な見

(77) 前出注44の本文を参照。

(78) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. II.

(79) 他の箇所では「何かが法哲学の課題であるとするれば、すべての法の根拠を人間精神の本性において証明することがそれではなければならない」と述べ、自らの考える法の哲学的考察の理念を明らかにしている。*Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. XIII.

(80) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. III.

(81) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. IV.

(82) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. IV.

(83) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. III, V.

(84) *Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832)* (前出注30), S. IV.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉⁽⁸⁵⁾方である。この見方は、法を「民族の精神的人格の一側面」、すなわち「民族の法的確信と習俗の総体」として捉える。ここでは、法は「恣意的」に作成されるものではなく、「言語」がそうであるのと同様、「必然的に民族の全き独自性ととともに与えられる」⁽⁸⁶⁾。

ベートマン=ホルヴェークによれば、このようなかたちで捉えられた法は、まずは「歴史的手法」によってのみ認識される。ついで、そうした法の認識には「文字資料」の使用が不可欠であることから「釈義」の方法が加わる⁽⁸⁷⁾。そのうえに、法は「事物の多様性において統一性」をもち、「内的な有機的連関」をもつことが承認されねばならないことから、「体系的」方法が必要となる。ここから、ベートマン=ホルヴェークは、これら歴史・釈義・体系という「三部門の統合的な使用」が、「実定法の本質を洞察する」ための、あるいは「実定法の根本的知識に到達する」ための「唯一の道」である、と述べる⁽⁸⁸⁾。さらには、こうした方法を用いることによる法の「体系的連関へのより深い入り込み」こそが、「法の自由な継続形成のための唯一の手段」⁽⁸⁹⁾であるとまで、述べている。そしてこのような性格を備えた法を「実定法」と呼ぶ⁽⁹⁰⁾。

ベートマン=ホルヴェークが描き出す「法の歴史的な見方」が、サヴィニーのそれを忠実に踏襲していることは明らかである⁽⁹¹⁾。しかし、ベートマ

(85) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. V.

(86) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. V.

(87) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. V.

(88) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. VI.

(89) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. VI.

(90) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. VII. この連関でベートマン=ホルヴェークは「類推」の役割に言及している。また別の箇所では、補助手段として自然法を用いる見解について否定的である (S. V.)。近代法学史における類推の歴史について、ヤン・シュレーダー (遠藤歩訳) 『初期近代の法学方法論における類推について』、同著 (石部雅亮編訳) 『ドイツ近代法学への歩み』3 頁以下を参照。類推については、同じくシュレーダー著 (石部雅亮編訳) 『トピック・類推・衡平——法解釈方法論史の基本概念』所収の同著 (児玉寛訳) 「法における類推の歴史と正当性について」もある。

(91) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. VI.

(92) サヴィニーの法学方法論については、次のものがサヴィニーの基本的な考えを知るうえで好適である。Friedrich Carl von Savigny, Vorlesungen über juristische Methodologie、

ン=ホルヴェークは、このような見方に「完全に満足を感じられるわけではない⁽⁹³⁾」とも付け加えている。というのも、たしかにこの見方においては、法は「歴史的必然性」と「体系的必然性」の二重の必然性において捉えられ、豊かな内容をもつ⁽⁹⁴⁾。しかし、それは、ゴシック建築の円天井が空中に浮かんでいるようなものであって、「確たる根拠」を欠いているのである⁽⁹⁵⁾。では、この「確たる根拠」とは何であろうか。

ベートマン=ホルヴェークによれば、「確たる根拠」とは、人間に広く共通する「必然性」のことであり、言い換えれば「法の一般的・倫理的現実」のことであり⁽⁹⁶⁾。彼にとって、これを欠いた法は、「真の法」とはいえない⁽⁹⁷⁾。つまり、ベートマン=ホルヴェークにとって、法は体系的に把握されうるものであると同時に、倫理的価値を内在させていることが不可欠だった。こうして、法と倫理の関係を「正しく規定すること⁽⁹⁸⁾」が、ベートマン=ホルヴェークにおいては法の哲学的基礎づけの核心部分となった。

↘ 1802-1842, herausgegeben und eingeleitet von *Aldo Mazzacane*, Neue, erweiterte Ausgabe, Studien zur europäischen Rechtsgeschichte, Bd. 174, Frankfurt am Main, 2004. また方法論の概要については次のものをあげておく。 *Joachim Rückert*, Juristische Methode und Zivilrecht beim Klassiker Savigny (1779-1861), in: *Joachim Rückert* (Hrsg.), unter Mitarbeit von *Frank Laudenlos, Michael Rohls und Wilhelm Wolf*, Fälle und Fallen in der neueren Methodik des Zivilrechts seit Savigny, Baden-Baden 1997, S. 25-70. (*Ders.*, Savigny-Studien, frankfurt am Main 2011, SS. 561-607.)

(93) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. IX.

(94) ここでもサヴィニーの方法論が忠実に継承されていることは明らかである。サヴィニーにおける二重の方法について *Joachim Rückert*, Idealismus, Jurisprudenz und Politik bei Friedrich Carl von Savigny, Ebelsbach 1984, S. 331f. を参照。また *Joachim Rückert*, Savignys Konzeption von Jurisprudenz und Recht, ihre Folgen und ihre Bedeutung bis heute, in: *ders.*, Savigny-Studien, frankfurt am Main 2011, SS. 17-53 にも簡潔な説明が含まれている。

(95) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. IXf.

(96) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. X.

(97) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. X. ここから、ベートマン=ホルヴェークは、倫理的根拠を欠いた法を「伝承された数学的技術を用いて「我のもの」と「汝のもの」の境界線を見いだす」測量のごときものと表現している。これに対して、ベートマン=ホルヴェークにとって、法は倫理的価値を内在させていることは必然的な前提であった。

(98) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. X.

(2) 法と倫理の関係における二つの自由

ベートマン=ホルヴェークは、『綱要』において法と倫理の関係の重要性に着目するなかで自由の意義にふれている。そこでは、おおよそ次のような見解が記されている。法と倫理の関係において前提となるのは、「人間」が「個別化された状態」、すなわち個々の人間がばらばらに分断された状態ではなく、「共同体においてその規定を見い出す」状態、共同体においてその現実存在を得ている状態である。ここにいう共同体とは、「理性的で倫理的な共同体」「倫理を促進する共同体」⁽⁹⁹⁾である。こうした共同体には、たとえば家族が含まれるが、そこには共同性が存在するだけでなく、同時に「対立」が組み込まれている。家族の場合であれば、家長に対する、家の他の構成員の関係がこれに当たる。それは倫理的なものの観点からみれば、家長の職務に「訓戒 [Lehre]」と「紀律 [Zucht]」が含まれる、⁽¹⁰⁰⁾ということを意味する。

このように述べたベートマン=ホルヴェークは、共同体を種と民族にまで拡大して捉えつつ、そこでは「始原的 [ursprünglich]」には結合していた諸機能がいまや分裂して作用するにいたっている、という。すなわち、「紀律」は政府に、そして「訓戒」は教会に、それぞれ帰属する。国家（政府）においては、「倫理的共同体」あるいは「法的共同体」⁽¹⁰¹⁾を実現することが追求されるが、それは「自由」を「紀律」すなわち「強制」⁽¹⁰²⁾という手段で追求することを意味する。その一方で、教会には、人類全体をその最内奥の中心点から、つまり「精神」から、「神と人類との完全な共同体」へと、つまりは「最高の自由」⁽¹⁰³⁾へと、導くことが委ねられる。

このように見てくると、ベートマン=ホルヴェークは、国家ないし政府と教会との機能の分化を前提にしながら、いずれもが何らかの「自由」を

(99) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XI.

(100) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XI.

(101) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XI.

(102) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XI.

(103) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XII.

実現するために機能することを述べていることが分かる。ここから、この序論において、ベートマン=ホルヴェークは二種類の「自由」を自らの法思想において取り入れているのではないかと想定することができる。

第一の自由は、国家ないし政府において「紀律」すなわち「強制」を通じて実現が図られる自由である。かかる自由は「倫理的共同体」もしくは「法的共同体」において実現されるとされ、それを実現する「強制」手段として「法」が想定されている。注目すべきは、たしかにベートマン=ホルヴェークは法と倫理の本来の強い結びつきを強調しているが⁽¹⁰⁴⁾、法の独自の機能についても明確に述べていることである。すなわち、法律学の役割は、「真に善く正しいこと」の「認識」ではなく、むしろそうしたことが「間接的に実現されうるための諸規定を発見する」ための「術〔Kunst〕」たることにある。それゆえ、それが用いる手段には、「法律学的諸概念・諸規則の装置全体とそれらの取り扱いの技術」が属している⁽¹⁰⁵⁾。

このような法ないし法律学の性格についての記述には、倫理との結びつきの有無ないし程度について明確さを欠くとはいえ、法が自立した知としての独自性を獲得すべきことが示唆されている、と言ってよいであろう。ということは、このような法により保護される自由は、何らかの意味で倫理から自立したかたちで保障される自由、ということになる。

これに対して、第二の自由は、教会に委ねられ、その手段は言葉ないし訓戒である。強制はここでは用いられない。ここでの自由は「最高の自由」であって、それは人類を神との「完全な共同体」へと高めることで実現される⁽¹⁰⁶⁾。

かかる「最高の自由」が、法と倫理の関係という問題とどのように関連するのか、ベートマン=ホルヴェークは説明を与えていない。しかしなが

(104) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XII. 「法は、政府の力により国家の内部で現実化されうるかぎり、倫理法則ないし神的法則と同一である」とされる。

(105) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XIII.

(106) *Bethmann-Hollweg*, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注 30), S. XII.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

ら、彼は、さきにみたように法と倫理の分離を前提しながらも、両者の結合を強く主張している。すなわち、「法はその内容を倫理法則すなわち神的法則から創り出す」のであり、さらには、「法は、政府の力により国家の内部で現実化されうるかぎり、倫理法則と同一」とまでいわれうるのである。⁽¹⁰⁷⁾このような意味での法が実現されることが、人類と神との「共同体」の形成であるならば、「最高の自由」とは法と倫理の同一化の上に成り立つものだ、ということになる。

ここにいたって、上記の第一の自由と、第二の「最高の自由」は、異なる性格のものであることが明らかになる。第一の自由は、法という強制手段により実現されるべき自由である。かかる法においては、倫理との内容上の関連性を否定するものではないが、その実現は政府や裁判所を通じて「外的」手段により実施される。⁽¹⁰⁸⁾これに対して、第二の自由は、人類の「最内奥の中心点」「精神」において教会の導きにより到達すべきものであり、神との共同体においてはじめて獲得される「最高の自由」を意味する。

(3)『綱要』第3版における自由の意義

以上のような1832年の時点でのベートマン=ホルヴェークの見解について、以下のように整理しておきたい。

第一に、ベートマン=ホルヴェークの法概念および法学の方法に対する理解は、サヴィニーのそれを忠実に踏襲している。法を「民族の確信」に基礎づける「歴史的な見方」にそれは最も顕著に現われる。また、歴史的な方法と体系的方法の結合による法把握にも言及している。注目すべきは、そのさい、倫理的価値を欠いた法を「真の法」とは解していないことである。ここから、倫理と法の関係が問題になるが、自由はかかる問題との関連で論じられる。

第二に、法と倫理は区別されるが、しかしその一方で、本質的な結合関係もまた示唆されている。ただし、現状では、国家（政府）と教会がそれ

(107) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注30), S. XII.

(108) Bethmann-Hollweg, Grundriß, 3. A. (1832) (前出注30), S. XI.

それ、外的側面と内的側面というかたちで機能分化すると説かれている。
また、このような機能分化の結果として、法に強制が不可欠の属性として
結びつけられている⁽¹⁰⁹⁾。

第三に、このような法秩序の目的は、「神と人類の共同体」において実現されるべき「最高の自由」にある、とされている。これに対して、権利＝主観的自由のような、秩序を構成する個々の市民にとっての自由ないし倫理の在り方については、たしかに言及はされているものの、詳細な議論が展開されているわけではない。そしてその結果として、個々の人間の自己決定ないし選択という意味での自由は、明確な理論的地位を与えられているわけではない。

2. 法と神の愛の統一における自由

—— サヴィニーの草稿へのコメント (1838 年)

1835 年の春にサヴィニーが『体系』の執筆を開始すると、ベートマン＝ホルヴェークはこれに協力をした。具体的には、サヴィニーの草稿を閲読し、これにコメントを与えている⁽¹¹⁰⁾。そのうちの一つ、『体系』第 52 節の草稿に対するベートマン＝ホルヴェークのコメントに彼の法思想を伝える貴重なテキストが残されている⁽¹¹¹⁾。それは、「法の概念」「法の諸部門」「私法の公法との関係」⁽¹¹²⁾の三部からなり、簡潔とはいえ、体系的にベートマン＝

(109) これ以前のベルリン時代に、すでにベートマン＝ホルヴェークは「強制」を法秩序にとって不可欠の要素と考えていた可能性が高い。この点、ヴァッハが伝えるベートマン＝ホルヴェークのベルリンでの『実定法のエンツィクロペディー』講義の内容を参照のこと。

Wach, Bethmann-Hollweg (前出注 3), S. 765.

(110) この点につき前出注 54, 55 を参照。

(111) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218r-219v. 1838 年 5 月 21 日付とされる (219v.)。

(112) 「法の諸部門」「私法の公法との関係」の二つの部門は、ベートマン＝ホルヴェーク自身の法の分節化の概要を述べている。この点で、当時の法学者が多岐にわたる見解を展開した法体系の分節化の理論をベートマン＝ホルヴェークもまた有していたことになる。当時のこの種の理論の歴史的概観として *Lars Björne*, *Deutsche Rechtssysteme im 18. und 19. Jahrhundert*, Ebelsbach 1984 を参照。ベートマン＝ホルヴェークは本書の分析対象として扱われていない。総則編を中心とするパンデクテン体系の歴史的成立過程については前掲 *Björne*, S. 250ff. のほか、比較的新しいものとして *Mathias Schmoeckel*, *Der Allgemeine* //

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

ホルヴェークが自らの法哲学を述べているものである。

まず注目すべきは、その冒頭、ベートマン=ホルヴェークが、既存の法哲学に依拠するのではなく、自ら法の哲学的基礎を探究すべきことを説いていることである⁽¹¹³⁾。すなわち、「いわゆる自然法の初期の諸体系」や「ヘーゲルやシュタール」に満足していない者は、自らの手で「法と諸権利のための一般的基礎を探究する必要がある」、と述べている⁽¹¹⁴⁾。この点で、ベルリン時代からつづく独自の法の哲学的基礎づけを試みる作業の一環として、このテキストを捉えることができる⁽¹¹⁵⁾。

さて、このテキストでベートマン=ホルヴェークが出発点としてとりあげるのは、「人間」である。すなわち、「人間」は、互いに離れ離れに存在するのではなく、また、「単なる思考法則（論理的倫理）」により支配されるだけの存在でもなく、神の被造物として存在し、それは三種類の態様を取る。

第一に、自由な被造物として。これは、「自己自身を規律する」存在であり、かつ神の意思と自らの意思の統一を可能とする点で神の似姿をもつ被造物である。

第二に、自然に対する主人として存在する。

第三に、人間の意思と神の意思の統一に基づきつつ、生ける共同体の一員として存在する。ここでは、隣人に対する倫理的行動は、神に対する宗教的なものを通じて条件づけられる。このことによって、その人間は「人

↘ Teil in der Ordnung des BGB, in: *Schmoeckel* u. a. (Hg.), *Historisch-Kritischer Kommentar zum BGB*, Bd 1 (2003), S. 123-165 を参照。ベートマン=ホルヴェークが歴史的方法にくわえ体系的方法についても注意深い考察を行っていたことを考慮すると、その体系的思考を近代ドイツ法学史のなかに位置づける作業も必要であると思われる。この点で *Haferkamp*, *Die Historische Rechtsschule*, Frankfurt am Main 2018, S. 228ff. が手掛かりを提供する。またベートマン=ホルヴェークは、ベルリンで民事訴訟法の研究に取り組む前にバンデクテンを講じていた。Wach, *Bethmann-Hollweg* (前出注 3), S. 764 を参照。

(113) Savignys *Nachlaß* (前出注 57) Bl. 218r.

(114) シュタールの見解に対するベートマン=ホルヴェークの立場については *Haferkamp*, *Christentum* (前出注 6), S. 527, 532f, 536, 537ff を参照。

(115) かかるベートマン=ホルヴェークの学問的独立性は、ハーハカンブがその宗教的基礎づけと関連づけつつ強調する点である。Haferkamp, *Christentum* (前出注 6), S. 520f, 514ff.

格〔Persönlichkeit〕」を喪失するのではなく、むしろ初めて見出すのであり、同時にそれは神への無条件の帰依でもある。この場合、神への帰依と「人格」の主張は完全に均衡が取れることになる。そこでは、「愛は汝自身に対するのと同様に隣人に奉仕する」からである。このような状態においては、「法と愛は一つのもの」である。またここでは、「自由」は「絶対的独立、離れていること、貧困、孤独ではなく、内容豊富な共同性、豊かさ、力への使命である⁽¹¹⁶⁾」。

しかしながら、ベートマン=ホルヴェークは、このような自由と共同性の調和的な両立、つまり「始原的〔ursprünglich〕関係」は、現実には「破壊された」とする⁽¹¹⁷⁾。第一に、人間と神の統一は破壊され、世界は人間とにとって此岸と彼岸、天と地、有限と無限に分裂した。第二に、自然に対する人間の支配が失われ、労働によってふたたびかかる支配を獲得する必要が生じた。第三に、自己愛により人間相互の関係が破壊された。このような状態のなかで、始原的関係の残滓を示唆するのが、「自然的紐帯⁽¹¹⁸⁾」たる家族と民族である⁽¹¹⁹⁾。

家族においては、「自然的なもの」と「倫理的なもの」との始原的統一、あるいは「倫理的なもの」と「宗教的なもの」との始原的一体性が見られる。ここでは、「人格」を面的に強調することは、「愛」としての倫理的なものを基盤とする家族の本質を破壊する⁽¹²⁰⁾。

民族〔Volk〕は、神の意思においては、人類の世界史的発展の必然的構成要素として位置づけられる。しかし、その起源と目標からすれば此岸的実在である⁽¹²¹⁾。そして、民族は、「自由な諸人格」の共同体として外的共同体であるのみならず、同時に倫理的共同体でもあって、かかる民族のことをベートマン=ホルヴェークは「国家」と呼ぶ。「意識的かつ倫理的に秩

(116) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218r.

(117) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218r.

(118) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218r.

(119) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218r.

(120) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218rf.

(121) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218v.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉
序づけられた統一体としての民族が、ただ国家であるにすぎない。⁽¹²²⁾

ここで注意すべきは、民族における「倫理的なもの」が、「現世的〔ir-disch〕」領域におけるそれとされていることである。つまり、かかる「倫理的なもの」は、「民族共同体の有機体の法則」として、彼岸的なもの、つまり宗教的なものから切り離されており、不完全で一面的なものであるにすぎない。その限りでこの「倫理的なもの」を、ベートマン=ホルヴェークは「法」と呼ぶのである。⁽¹²³⁾そして、かかる不完全性から国家と法の役割が明らかになる。

すなわち、法は、「人格」による主張を可能とするにすぎず、宗教的なものから捨象されているのであって、法において人間は「絶対的に独立的なもの」として現われる。ここでは、人格は自らを主張する存在であることから、共同性を確立するとしても、それは相互の承認を通じて得られる「外的」なそれにすぎない。また、法は内面的拘束力をもたないため、その内容は強制を通じて実現されねばならない。それは個々人の悪しき意思（恣意）を、国家という高次の意思により克服する必要がある、ということ⁽¹²⁴⁾を意味する。つまり、ここでは、国家が強制を通じて人びとの意思の統一を図るわけである。⁽¹²⁵⁾

このような 1838 年のベートマン=ホルヴェークの見解において、「自由」はどのように理解されているだろうか。

第一に、明らかに「自由」が法秩序の重要な要素として現われていることが確認できる。そして注目すべきことに、それは「自己自身を規律する」という意味で用いられており、⁽¹²⁶⁾「人格」の本質的な属性とされる。

ここで留意しておかねばならないのは、かかる人格が、同時に、自らの

(122) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218v.

(123) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218v.

(124) Savignys Nachlaß (前出注 57), Bl. 218v.

(125) この点で、ベートマン=ホルヴェークの法理論には「強制」という要素が明示的に含まれている。ハーファカンフは、この 1838 年のテキストを取り上げるさい「強制」の要素についてふれていない。Haferkamp, Christentum, S. 531f.

(126) 原文では“frei”を“sich selbst bestimmend”と言い換えている。

意思を神の意思と一致させるという意味において倫理的善を志向する、とされていることである。すなわち、ここにいう「人格」は、自らの意思によって神への「帰依」を選択する自由をもつ。そして「人格」が自ら「帰依」を選択することで、人間の自由な選択は神的善と調和し、倫理を実現する「生ける共同体」の樹立が可能になる。ここにいたり、自由は共同性と両立しようとするとともに、そこには、自ら善を選択するという意味での自己決定の契機が含まれていることになる。

第二に、法と倫理（神的意思）が、本来なら秩序形成のために調和し、一致して機能すべきとされつつも、現世においてそれらが分離してしまっていることが説かれており、さらにそこから国家の役割が説明されていることが確認できる。国家の役割は、個々人の自由な意思が「悪しき意思＝恣意」となりかねない場合に、「強制」を通じて高次の意思へと集約することにある。この場合、法は、倫理から切断されたうえで、強制を通じて秩序をもたらす機能をもつものとして説明されている。

3. 法体系の基礎としての「自由」と「関係」

——『体系』第1巻への書評（1840年）

サヴィニー『体系』の第1巻が1840年に公開されると、ベートマン=ホルヴェークはただちにこれに対する書評論文を発表した⁽¹²⁷⁾。そこでは、全体として『体系』の学術的価値を高く評価する調子が貫かれているものの、論点によってはサヴィニーの見解を批判している場合もある。さらには、ベートマン=ホルヴェーク自身の独自の見解を述べている箇所も散見され、この書評論文は、同人の見解を知るうえで重要な資料といえる。本稿の主題との関連で興味深いのは、この書評論文なかで、ベートマン=ホルヴェークが法体系の基礎づけの理論に言及していることである⁽¹²⁸⁾。

(127) 前出注58参照。

(128) これに対して、ベートマン=ホルヴェークは、この書評論文において法解釈方法論にはごく僅かにしかふれていない。*Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny*（前出注58）、S. 1602f.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

ベートマン=ホルヴェークはこの基礎づけの理論においても、サヴィニーの見解を肯定的に評価する点にくわえ、明確な対立点をも明らかにしている。肯定的に評価する点の1つが、法体系の基礎づけに当たりサヴィニーが「関係」を引き合いに出していることである。これに対し、サヴィニーが法体系の基礎としての「自己への権利」を実定的権利として排除することには、明確に反対している。以下では、これら二つの局面をとりあげ、それらにおける自由の意義を検討する。

(1) 法体系の基礎としての「関係」の意義

サヴィニーの『体系』の序論には、サヴィニー自身が自らの体系的方法を説明している部分がある。⁽¹²⁹⁾ ベートマン=ホルヴェークはこの書評論文のなかで、かかるサヴィニーの説明に論評をくわえている。そのさい彼は、不十分な体系的方法との対比をおこないながら、理想的な体系的方法としてサヴィニーの見解を解説している。⁽¹³⁰⁾

ベートマン=ホルヴェークは、まず、当時のパンデクテン講義や教科書を「支配」する一般的な体系的方法を批判する。⁽¹³¹⁾ すなわち、それらの体系においては、個々の規定や学説の詳細について何らかの「共通の指標」を把握し、それを基に「特殊的なものからの抽象化により一般的なものを形成する」ことが行われる。このようにして得られた「一般的なもの」は、それが個別的なものを論理的に含んでいる限りで、「概念」と呼ばれ、共通の指標を基に規定がなされることで「規則」が形成される。

だが、ベートマン=ホルヴェークはこうした手法には難点があるという。というのは、「かかる一般化はたしかに論理的に正当で、矛盾を含まない分類」を保証するが、そうして得られる統一性は、「実質的には不完全である」からである。⁽¹³²⁾ ここにいう「実質」とは、法の内容のことであり、

(129) Savigny, System I, S. XXXVI.

(130) このような説明手法は、明らかに後年のサヴィニー追悼論文における記述にも受け継がれている。Bethmann-Hollweg, Savigny (前出注 73), S. 49ff. Haferkamp, Die Historische Rechtsschule (前出注 112), S. 258.

(131) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1577.

(132) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1577.

ベートマン=ホルヴェークは、このような内容を従来の手法では完全に捉えつくすことはできない、と批判する。なぜなら、そのような手法によったのでは、「われわれに経験を伝えてくれる諸現象の多様性を把握することは不可能」だからである。以上に対して、このようななか「真の体系」への導きとなったのが、歴史学派、とりわけサヴィニーの法学方法論なのであった。⁽¹³³⁾

ベートマン=ホルヴェークはここで、サヴィニーの方法論を念頭に置きながら、法の体系的統一は、一つの最高概念からすべての個々の概念と命題を導出することを意味するわけではない、という。法は「多様な性格をもつ」のであって、それは「抽象的概念」としてのみならず「歴史的概念」としても把握されねばならない。⁽¹³⁴⁾ それゆえ、このような概念の導出は「分析的」なそれではない。すなわち、概念の導出とは、「すでに高次の概念および最高の概念に含まれているものの説明」ではなく、「この〔第一の〕概念に根をもちつつも、この概念に巻き込まれているわけではない第二の概念」への展開のことである。⁽¹³⁵⁾ たとえば、「人格および自由意思の概念には、所有の概念は含まれていない」。派生的な第二の概念は、「ある前提の下でのみ、それが考慮される」にすぎないからである。第一の概念から第二の概念の展開を可能にするには、両者の間に別の〈第三のもの〉を介在させなければならない。所有から契約と債務関係への展開についても、個々の人格から家族と国家への展開についても、同様のことが言える。⁽¹³⁶⁾

では、そのような〈第三のもの〉とは何か。ベートマン=ホルヴェークはこれを「人間の一般的本性を通じて与えられた現世的関係〔das durch die allgemeine Natur der Menschen gegebene irdische Verhältnis〕」と理解する。彼はかかる関係の存在を前提に、「法の課題」は「自由意思の多

(133) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1578.

(134) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1579.

(135) このような手法をベートマン=ホルヴェークは後年、「総合的」方法と呼んだ。

Bethmann-Hollweg, Savigny (前出注 73), S. 51.

(136) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1579.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

様な諸関係を人間の自然的関係を通じて追求すること」に存在する、と規定する。すなわち、法体系の構築に当たっては、自由意思の関係と自然的関係の二重の「関係」を考慮する必要があるのであって、法は「これら両方の要因の産物」なのである。そしてこのことをふまえて、ベートマン=ホルヴェークは、法体系の基礎づけとしてこれらいずれの関係が適切かという問題は意味がない、とも述べている。⁽¹³⁷⁾

以上のような記述は、書評という文章の性格上、まずはサヴィニーの体系的方法の解説というかたちで語られてはいる。しかし、同時にそこにベートマン=ホルヴェーク自身の法哲学が含まれていることは明らかである。⁽¹³⁸⁾そこでは、既存の体系的方法を「分析的」と評し、それが法を十分に捉えることができないことを述べたうえで、「関係」を引き合いに出しながら自らの体系的方法の特性を明らかにしている。

このようなベートマン=ホルヴェークの見解について次の点を強調したい。それは、法の体系的基礎づけのために「自由意思の関係」にくわえ「自然的関係」の重要性が説かれていること、である。

ここにいう「自然的関係」が、さきに出た「現世的関係」のことを指し、さらには、ある概念から第二の概念を導出するさいに付加すべき〈第三のもの〉を指すことは明らかである。たとえば、単独の自由意思に、意思が客体を支配するという「関係」が加われば、所有関係が成立するであろう。あるいは一者の自由意思と他者の自由意思が存在する場合に、互いに何ら

(137) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1580. (傍点は耳野)

(138) ベートマン=ホルヴェークはサヴィニーの方法論に強く傾倒しており、それを自らの方法として強く意識していた。この点で印象的なのは、代表作である『歴史的発展における普通法民事訴訟』第1巻のサヴィニーへの献辞に「法学方法論におけるわれわれ全員の師匠」という呼びかけが記されていることである。*Bethmann-Hollweg*, *Der Civilrprozeß* (前出注 2), S. V. このような方法論への傾倒が、サヴィニーにおけると同様、ベートマン=ホルヴェークにおいても、同時に法のメタ理論として展開されていることは、本稿の記述からも明らかであろう。なお、ベートマン=ホルヴェークにおいては、サヴィニーの講義の方法への高い評価が、その法学方法論と結びついていたことも明らかである。*Bethmann-Hollweg*, Savigny (前出注 73), S. 47f. サヴィニー『体系』第1巻に対する書評においても体系的的方法論に関して相当の分量を割いている。*Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1576ff.

かの約束が結ばれて自由意思相互の関係が生ずることで、契約関係が成立するであろう。そこには、個々人の単独の自由意思のみならず、人と物との関係、あるいはある人と別の人との関係といった、異なるかたちの「関係」の存在が前提される。⁽¹³⁹⁾つまり、1840年の時点で、ベートマン=ホルヴェークは、法体系の基礎づけについて、「自由意思」にくわえ、これには直接還元できない何らかの「関係」を考慮する必要性を主張したのである。⁽¹⁴⁰⁾

(2) 「関係」における「自由」の意義

このように、ベートマン=ホルヴェークは法体系の構築に当たり、「自然的関係」と「自由意思の関係」のいずれについてもその重要性を強調している。では、このような見解において自由はどのような意義を与えられているだろうか。ここでは、二つの関係のうち、明示的に「自由」に関係づけられている「自由意思の関係」に注目し、ここでの「自由」の意義を検討する。

まず手がかりとして参照すべきは、サヴィニーの「自己への権利」に関する記述にベートマン=ホルヴェークが批判を加えるくだりである。⁽¹⁴¹⁾なぜなら、この批判の趣旨をたどることで、法体系の基礎づけとの関連でベートマン=ホルヴェークが自由をどのように理解しているか、明らかにすることができからである。

サヴィニーは法体系を基礎づけるにあたり、「法関係の本質」を「個人の意思が独立して支配する領域」と規定しつつ、「自己の人格」をそうした支配の対象から除外している。⁽¹⁴²⁾その理由は、二つある。第一に、「自己の人

(139) この点について、ここでは、ベートマン=ホルヴェークは具体的な説明を与えていないが、サヴィニーの記述が参考になると思われる。*Savigny, System I*, S. 333f, 335ff. なお、ここで語られるような「諸関係」になぜ「自然的 [natürlich]」という形容が与えられるかについては、説明は与えられていない。

(140) *Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny* (前出注 58), S. 1587 には次のような記述がある。「……法の独自の目的は、市民社会の圏域において、個々人の意思に内在する力の自由な(適切な)展開を保障すること、すなわち、現世的現実存在のすべての諸関係において人格を保障すること、これである。このことによって、同時に倫理的意思を展開するための領域が準備される。」(傍点は耳野による)

(141) *Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny* (前出注 58), S. 1604.

(142) *Savigny, System I*, S. 334f.

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

格」に対する人間の支配力を疑うことはできないし、他のすべての権利の前提であることも肯定されるが、それは実定法による承認と限界づけを必要とするものではない。第二に、「自己の人格」に対する支配力を他人の干渉から保護するための多くの法制度が存在するが、それらは、人格の不可侵性を発展させたものではなく、もっぱら実定的な法制度であるにすぎない。⁽¹⁴³⁾

このようなサヴィニーの見解に対して、ベートマン=ホルヴェークは、かかる議論はサヴィニーの「体系における欠陥を示している」という。⁽¹⁴⁴⁾これはどのような意味であろうか。

サヴィニーは『体系』第1巻において、法源についての見解（第1部「現代ローマ法の法源」）を明らかにしたあと、ただちに「法関係」について⁽¹⁴⁵⁾の記述に取りかかっている（第2部「法関係」）。そして、この「法関係」の部門では、まず第1章「法関係の本質と種類」において法関係に基づく法体系の基礎理論が明らかにされ、ついで第2章「法関係の担い手としての人」において、「人」に関する記述を行っている。つまり、サヴィニーの記述では、「人」は「法関係」に関わる記述の一部として、これに組み込まれてしまっており、独自の地位を与えられていない。

このような記述の流れは、ベートマン=ホルヴェークから見れば、「自然な中間項」である「人〔Person〕」を飛び越した形になっており、容認できないものであった。⁽¹⁴⁶⁾言い換えれば、ベートマン=ホルヴェークの立場から見れば、サヴィニーは法源に関する記述を終えたのち、法関係の説明に入るまえに「人」についても一章を割り、それに相応しい記述を与えるべきであった、ということである。⁽¹⁴⁷⁾というのも、ベートマン=ホルヴェーク

(143) ここでは、ベートマン=ホルヴェークによる解説を参照。Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1604.

(144) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1604.

(145) サヴィニー『体系』の配列がもつ意味については Joachim Rückert, Savignys Dogmatik im „System“, in: ders., Savigny-Studien, Frankfurt am Main 2011, S. 167f で詳しい検討がなされている。

(146) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1604.

(147) 実際、ベートマン=ホルヴェークの法体系の記述には、独立の第一部門として「人格〔Persönlichkeit〕」が考えられている。Bl. 219r (前出注 57) を参照。なお、サヴィニー

にとって、「人」すなわち「自らに含まれるいっさいをとまなう人格」とは、法体系において「独自の意義」をもつからである。それゆえ、それは、所有権のような「市民法の産物」としてのみ記述されうるものではなかった⁽¹⁴⁸⁾のである。では、そのような「人」がもつはずの「独自の意義」とはどのようなものだったのだろうか。

かかる「独自の意義」についてベートマン=ホルヴェークがこの書評論文において与えた説明は、「人」は「家族関係がそうであると同様に始原的〔ursprünglich〕である⁽¹⁴⁹⁾」という一節だけである。だがここには、重要な手がかりが示唆されている。というのも、この一節を素直に読むならば、家族関係が「始原的」性格を有しており、それは人がもつ「始原的」性格と同様のものである、という趣旨を読み取ることができるからである⁽¹⁵⁰⁾。

では、家族関係がもつ「始原的」性格とはどのようなものだろうか。手がかりになるのが、家族関係に関するサヴィニーの見解を解説するなかでベートマン=ホルヴェークが述べている自らの見解である⁽¹⁵¹⁾。そこで彼は、財産法との対比から家族関係の特質を述べている。すなわち、「財産法」においては、「人をその個別化において考える」が、これに対して、「家族はヨリ高次の統一性のうちにある」。ここでは、家族は「神的秩序」に従

ㄨ 『体系』において「人」に関する記述は第2巻に収められているが、この巻については第1巻とあわせてプフタが書評を著わしている。*Georg Friedrich Puchta*, Rezension Savigny, System des heutigen Römischen Rechts Bd. 1 und 2, in: Richters Jahrbücher 4 (1840), S. 673f. サヴィニーとは異なり、プフタが「人格」を法体系の基礎として重視したことはよく知られている。この点はサヴィニーも『体系』のなかでふれている。*Savigny*, System I, S. 337 Fn. (a).

(148) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1605.

(149) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1605.

(150) ここでベートマン=ホルヴェークが参照を求めるのは *Savigny*, System I, S. 344 である。サヴィニーは、財産法と家族法の差異について次のように述べている。債務関係と所有の両関係を包含する「財産関係〔Vermögen〕」は、個々人の意思の力がその自然的限界を超えて拡大したものであるが、その一方で、家族関係は、それ自体として不完全な自己の拡大を目的とする。それゆえ、家族法は財産法に比していわゆる原権利により近い。そのため、「原権利が実定法の領域から完全に排除されるように、家族もまたただ部分的ののみ法の領域に属するにすぎない」。

(151) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1607f. 傍点は耳野。

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

い、「自然的本能」により支えられつつ「不完全な個々人」が「種」へと媒介される。すなわち、「本来人類全体にとって始原的に規定されているように」、家族関係は「愛における倫理的共同体」として語られることができる。

このように見てくると、家族関係が「始原的」性格をもつとは、それが「神的秩序」に従うことで「ヨリ高次の統一性」をもち、「愛」を通じての「倫理的共同体」を形成する、という意味であることが分かる。「倫理的共同体」の「本質」は、「愛」において個々人の「諸意思の統一」が成立することにある、というのも同様の趣旨であろう。そこでは、「人」は互いにばらばらに分断されているのではなく、「内的」なものを通じて結び付けられている。⁽¹⁵³⁾

ここで注目すべきなのは、このような意味での「人」にこそ、「真の自由」が帰属するとベートマン=ホルヴェークが考えていたことである。なぜなら、彼はこのような神の愛を通じての共同性の確立を、「愛における意思の自由な相互融合」と呼び、これを「真に自由で精神的な存在にのみ相応しい」と考えているからである。このような神の愛に基づく共同性と自由の両立というかたちで現れる人間と人間の間を、ベートマン=ホルヴェークは「始原的」と形容したのだと解される。⁽¹⁵⁴⁾

これに対して、ベートマン=ホルヴェークにとって、「人」が法的存在として現われるとき、それは、「始原的」存在とは別のかたちをとる。すなわち、法的対象としての「人」とは、「権利の対象」として、「特定の資格」において「強制」などの「純然たる外的行為」を通じてはたらきかけを受ける。⁽¹⁵⁵⁾ここでは、「始原的」関係における人間のもつ人格のうちの一

(152) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1608.

(153) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1612.

(154) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1587. 傍点は耳野。

(155) ここでの「始原的」という形容の使用法は、さきにみたベートマン=ホルヴェークのサヴィニーの草稿に対するコメントでの「始原的」という語の使用法と一致する。前出注 117 の本文を参照のこと。

(156) Bethmann-Hollweg, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1612.

部だけが、はたらきかけの対象となるにすぎない。つまりこの場合、愛に基づく倫理の領域は、「法の圏域から切り離される」のである。⁽¹⁵⁷⁾

かくして、ベートマン=ホルヴェークが「自己への権利」との関連からサヴィニーを批判した趣旨もより明確になる。すなわち、「自己への権利」を実定法体系の基盤として放棄し、「人」を法関係の記述の一部としてのみ考慮するというサヴィニーの手法は、秩序形成における人間の意義を矮小化しすぎている。なぜなら、個々の人間は「人」として、神の愛を通じて倫理的共同体を形成する能力をもつのであり、かかる能力こそは、人間に与えられた「始原的能力」すなわち「真の自由」に他ならないからである。

4. 前半期のベートマン=ホルヴェークの法思想における「自由」の意義

以上、前半期におけるベートマン=ホルヴェークの見解を検討してきた。ここで、その内容を整理しておきたい。

ベートマン=ホルヴェークは、1830年代に入り、自身の法思想の哲学的基礎づけを試みるようになった。そこでは、キリスト教倫理に基づく法の基礎づけを探求することが核心をなした。

独自の見解を表明する最初の試みとなったのが、『綱要』第3版の序論における記述であった。そこでは、法を民族の共通意識の産物と捉えるサヴィニーの見解を忠実に踏襲するとともに、法と倫理の関係を人類と神との共同体の形成という観点から捉えた。そのなかで、ベートマン=ホルヴェークは、自由を二重のかたちで表現している。ひとつは、国家が紀律を通じて、すなわち法による強制を通じて実現する自由である。これに対して、教会は言葉ないし訓戒を通じて「最高の自由」へと人びとを誘う役割をもつ。また、法と倫理の関係については、両者の本来的な結合を強調しつつも、現状においては両者が分離して機能することを前提としており、

(157) *Bethmann-Hollweg*, Rez. zu Savigny (前出注 58), S. 1608. この意味で、「市民法の産物」にすぎない所有権から人が厳然と区別されることは、ベートマン=ホルヴェークにとっては当然のことであったであろう。前出 148 の本文を参照。

モーリツ・アウグスト・フォン・ベートマン=ホルヴェークの法思想における〈自由〉と〈関係〉

同時に法が自立的な知の存在様式をもちうることを承認している。

その後ベートマン=ホルヴェークは、サヴィニーの『体系』の執筆に協力するなかで、1838年には詳細な法の哲学的基礎づけを展開した。ここで彼は、人間が神と「生ける共同体」を形成しうることを説いている。ここでは、法は愛と同一である。このような場合、個々の人間が有する自由は、同時に神への「帰依」を選択することで、自由は神的善と調和し、人間と神との共同性を可能にする、ということの意味する。しかし、現実にはそうした共同性が破れていることから、国家が法による強制を通じて個々人の自由な意思を集約することの必要性が言及されている。

1840年の『体系』第1巻への書評では、サヴィニーの体系的方法を解説するのに付随して、ベートマン=ホルヴェークは自らが理想とする方法論を、「関係」を引き合いに出して説明している。すなわち、体系的方法においては、第一の概念から第二の概念を分析的に導出する手法ではなく、これらに〈第三のもの〉を外から組み入れる手法をとる。この〈第三のもの〉が「関係」である。「関係」は「自然的関係」と「自由意思の関係」という二重の関係として捉えられており、これら両者から法が生まれる、とされる。

なお、これらの関係のうち「自由意思の関係」における自由とは、個別化された個人の自由ではなく、神の愛の下に統合された共同体を形作る「人」のもつ自由である。それは、言い換えれば、他の人間との「相互融合」へと入り込む自由でもある。このような「人」は倫理的共同体に属するのであって、法の領域にのみ属するのではない。そして、このような「人」がもつ自由こそが、ベートマン=ホルヴェークのいう「真の自由」である。

以上から、前半期における「自由」の意義について、次のように言えるであろう。本章で取り上げた三つのテキストすべてにおいて、自由は重要な役割を与えられている。これは、前半期のベートマン=ホルヴェークの法思想を通じて、自由が変わることなく中核的意義を与えられていたことを意味する。ベートマン=ホルヴェークが理想と考える法秩序は、神の愛

の下に人間が神とともに形作る共同体のうちにあるとされ、自由もまた、
そのような共同体における人間の自由とされる（「真の自由」）。